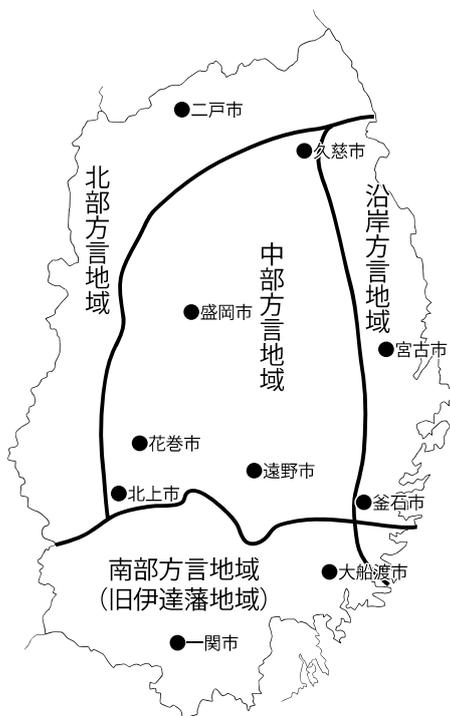


岩手県盛岡市方言



岩手県方言区画図(本堂 1982 による)

【岩手県の方言区画】大きくは、西和賀町・北上市・花巻市・遠野市・釜石市を南北に分けるように、旧南部藩／旧伊達藩の藩境によって、南の南部方言地域が区分される。次に、県中央部を南北にはしる北上山地によって、東側が沿岸方言地域に分けられる。南部方言地域の沿岸部には、沿岸方言地域と重なる部分がある。さらに、内陸の中央部には中部方言地域、西側に秋田方言の影響が強い北部方言地域がある。旧南部藩地域は、岩手県北部に続く青森県太平洋側と秋田県鹿角地方であり、この地域の方言はいわゆる南部弁と呼ばれる。旧伊達藩地域の方言は、仙台弁／伊達方言などと呼ばれる。

【盛岡市方言について】盛岡市は、岩手県の県庁所在地で、旧南部藩の城下町である。東西南北への旧街道や国道・鉄道、北上川などが交差する交通の要所であり、旧南部藩地域の全体からするとやや南側に位置する。

盛岡市方言は、東北方言の中では北奥羽方言の太平洋側、つまり旧南部藩地域の方言に分類されるが、

城下町であったため周辺地域に比べて敬語が発達した。一部の語彙や文法形式において商家・武家・役人などの位相を反映したとみられることばの違いや男女差がある。また、促音・撥音・長音が直前の音と一体化するなどいわゆるシラビーム方言の特徴を持つ。アクセントは高低アクセントで、東京式(北奥羽式)とされている。

盛岡市方言を取り上げた文献として、『御国通辞』(1790年)、『谷の下水』(1799年)、『杜陵方言考』(1877年頃)などの語彙集や、「盛岡及び近在の方言の発音」(1929年・橋正一)、「北奥方言の発音とそのアクセント(ズーズー弁考)」(1932年・金田一京助)など音声や文法を取り上げたもののほか、参考文献にあげた概説書・方言集・方言辞典がある。【表記について】次の基準による。文献からの引用例文では原典の表記にしたがう。

「イ」と「エ」の中間音を「イ」/i/で表す。

「シノス」[si] 「ジノズ」[zi] 「チノツ」[tsi] をそれぞれ「ス」/su/、「ズ」/zu/、「ツ」/cu/で表す。

/ai/・/ae/ など連母音の融合音[ɛ][e]を工列音の仮名に小字体の「ァ」を付して示す。

有声母音に挟まれたカ・タ行音は濁音化する場合があるが(濁音化しない場合もある)こうした音声的環境によって生じる濁音の表記は、語形を提示する際(活用表中など)では行わない。例文中では通常の濁音表記を行う。

本来の濁音は語頭以外では鼻濁音(ガ行は η-, ダ・ザ・バ行は入り渡り鼻音を伴う音声)で発音されることがあるが(破裂音の場合もある)区別せず、゛による濁音表記を行う。

【調査概要】本稿の記述は、基本的に盛岡市(旧市街地)に生育した高年層話者への聞き取り、筆者の内省(1968年生まれ)同地域の話者が執筆した辞典・随筆による。用例は、それらの辞典・随筆から部分的に引用した(用例出典参照)。引用元の記載のないものは、高年層生え抜きへの聞き取り調査による例文、または筆者の作例である。

岩手県盛岡市方言の活用表

《動詞》

活用形		類別	a類 書く	b類 見る	来る	する
終 止 類	断定非過去		カク	ミル	クル	スル ス
	断定過去		カイタ カイトッタ	ミタ ミタッタ	キタ キタッタ	スタ スタッタ
	命令		カケ カクモシエ	ミロ ミルモシエ	コー クルモシエ	シェ スルモシエ スモシエ
	禁止		カクナ	ミルナ	クルナ	スルナ スナ
	意志		カクベ	ミルベ	クルベ	スルベ スベ
	勧誘		カクベス	ミルベス	クルベス	スルベス スベス
	推量		カクコッタ カクベ	ミルコッタ ミルベ	クルコッタ クルベ	スルコッタ スルベ スベ
接 続 類	連体非過去		カク	ミル	クル	スル ス
	連体過去		カイタ カイトッタ	ミタ ミタッタ	キタ キタッタ	スタ スタッタ
	中止		カイト	ミテ	キテ	ステ
	仮定		カケバ カカバ カイタラ	ミレバ ミラバ ミタラ	クレバ コレバ クラバ コラバ キタラ	スレバ シェバ スラバ サバ スタラ
	継起		カイトレバ カイトツケ(ヤ)	ミタレバ ミタツケ(ヤ)	キタレバ キタツケ(ヤ)	スタレバ スタツケ(ヤ)
派 生 類	否定		カカネア	ミネア	コネア	スネア サネア
	丁寧		カキヤンス	ミヤンス	キヤンス	スヤンス
	使役		カカシエル	ミサシエル	コサシエル	サシエル
	受身		カカレル	ミラレル	コラレル	サレル
	可能肯定		カケル カクニイー	ミレル ミルニイー	コレル クルニイー	サレル スルニイー
	可能否定		カケネア カカレネア カカサラネア	ミレネア ミラレネア ミラサラネア	コレネア コラレネア コラサラネア	サレネア シェネア ササラネア
	自発		カカサル	ミラサル	コラサル	ササル
	尊敬		オカケル オカキヤル	オミレル オミヤル 《ゴロズル》	《オデアル》	《ナサル》 スナサル
	継続		カイトル カイトタ カイトラ	ミテル ミテタ ミテラ	キテル キテタ キテラ	ステル ステタ ステラ
	希望		カキテア	ミテア	キテア	ステア
	のだ		カクンダ	ミルンダ	クルンダ	スルンダ スンダ

a 類動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak・u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik・uはkをQ(促音)にし「イッ-タ」。
g	嗅ぐ kag・u	カイ-ダ	gをiにする。-タが-ダになる。
s	出す das・i	ダシ-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t/c	立つ tac・i	タッ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin・u	シン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob・u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom・u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir・u	キッ-タ	tをQ(促音)にする。
w/	買う ka(w)・u	カッ-タ	wをQ(促音)にする。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生(だ)
終 止 類	断定非過去	アケア	スンツカダ	学生ダ
	断定過去	アケアカッタ	スンツカダッタ スンツカデアッタ	学生ダッタ 学生デアッタ
	推量	アケアコッタ アケアベ アケアカベ アケアカンベ	スンツカダコッタ スンツカダベ	学生ダコッタ 学生ダベ
接 続 類	連体非過去	アケア	スンツカナ	《学生ノ》
	連体過去	アケアカッタ	スンツカダッタ スンツカデアッタ	学生ダッタ 学生デアッタ
	中止	アケアクテ	スンツカデ	学生デ
	仮定	アケアバ アケアカラバ アケアカッタラ(バ)	スンツカダバ スンツカデアレバ スンツカダッタラ(バ)	学生ダバ 学生デアレバ 学生ダッタラ(バ)
派 生 類	否定	アケアクネア	スンツカデネア	学生デネア
	なる	アケアクナル	スンツカヌナル	学生ヌナル
	継続	アケアクテル アケアクテタ アケアクテラ		
	丁寧	アケアゴザンス アケアガンス	スンツカデゴザンス スンツカデガンス	学生デゴザンス 学生デガンス
	のだ	アケアンダ	スンツカナンダ	学生ナンダ

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

a 類動詞(五段動詞)は 型、b 類動詞(一段動詞)は 型と 型 r、「来る」は 型 k と 型 r、「する」は 型 s と 型 r の活用形をもつ。

共通語と異なる点をあげる。「来る」については、命令形に 型 k の「コ」がある。「する」については、過去形(スタ)、非過去形(ス)、中止形(ステ)、命

令形(シェ)、仮定形(シェバ)、否定形(サネア)等に 型 s の活用形があり、「する」の活用体系が 型 s 化(サ行五段化)の途上にあるとみられる。

(2) 各活用形の特徴

〈断定非過去形・連体非過去形〉

断定非過去形、連体非過去形は同形で、「書く」「見る」「来る」「する」は、ウ段形の「カク」「ミル」「ク

ル」「スル/ス」となる。「する」には「ス」という型s化した形が現れる。

- ・地面サなぬが書く時あ、のろぎで書いたもんだ。(地面に何か書く時は、蠟石で書いたものだ。)(中谷 a・「のろぎ」)
- ・ちゃかつとす。(ちよつとする)。(中谷 a・「ちゃかつとす」)

この方言の断定非過去形には、共通語では意志形に訳されるような用法がある。

- ・おぐやみぬいってくる。(お悔やみに行ってくる。)(中谷 a・「おぐやみ」)
- ・今日は もは 寝る。(今日はもう寝よう。)
- ・いず死ぬがどもつた。(いつ死のうかと思っていた。)

〈断定過去形・連体過去形〉

断定過去形、連体過去形は同形で、a 類動詞では基幹音便形、b 類動詞では 型基幹 (= 語幹)「来る」「する」では 型 k イ段形「キ_レs イウ段形「ス」に「タ」を後接した形となる。

- ・ゆんべお墓でひかりもの見だ。(夕べお墓で怪光を見た。)(中谷 a・「ひかりもの」)
- ・お前えのよんた、しえっこぎあみだごだねえ。(お前のような、面倒くさがりは見たことがない。)(中谷 a・「よんた」)
- ・すす踊りきたじえ。(鹿踊りが来たぞ。)(中谷 a・「すすおどり」)
- ・きなすで通すて来た人だ。(思慮なしでこれまで通して来た人だ。)(中谷 a・「きなす」)
- ・かっころんで、あごた怪我すた。(すっ転んで、下あごに怪我をした。)(中谷 a・「あごた」)

断定非過去形や「タ」に「ツケ」が付くことがあるが、単純な過去形ではない。「ツケ」が付くと、話し手の過去の体験や知識にかかわる表現になる。ただし、「来るっけ人」「行ったっけ時」のような連体用法は使われない。

- ・(おばあさんは)おだやすむずのごど、「おでえすず」ってそーつけ。(御田屋清水のことを、「おでえすず」と言った。)(注：そー(言う))
- ・問い合わせたら、すばらくもつてがら返事きたつけ。(問い合わせたら、しばらく経ってから返事来た。)(中谷 a・「もつてがら」)

「タ」と同様に、「テアツタ」が縮約した「タツタ」が付くが、「ダツタ」のように有声化することがある。「タツタ」は、当該方言では発話時現在から切り離された過去の出来事を表すが、「タ」による表現にはこのような制限がない。

- ・きんな山であおす見だつたよ。(昨日、山でカモシカを見たよ。)(中谷 a・「あおす」)
- (注：発話時にはカモシカはいない)

〈命令形〉

命令形では、a 類動詞はエ段形の「カケ_レ b 類動詞ではオ段形の「ミロ_レ「来る」は「コー_レ「する」は「シェ」となる。

- ・うるしえがら、あつつさいげ。(うるさいから、あっちへ行け。)(中谷 a・「あつ」)
- ・そごれえ、探すて見る。(そこらを、探して見る。)(中谷 a・「そごれえ」)
- ・ちよつと、こつつあこあ。(ちよつと、こっちへ来い。)(中谷 a・「こあ」)
- ・すつかど挨拶しえよ。(しっかりと挨拶しろよ。)(松本 a・「南部賞」)

やや穏やかな命令表現に、断定非過去形に「申す」の命令形モシェ (ムシエまたはミシエ) が付く形がある。「来る」では、断定非過去形にない 型 k のウ段形「ク」に「モシェ」が付く形もある。

- ・腹減ったべ、くもしえ。(腹が減ったろう、食いなさい。)(中谷 a・「くもしえ」)
- ・明日、あさま早えんだがら、もうはねるもしえ。(明日、朝早いんだから、もう早く寝なさい。)(中谷 a・「ねるもしえ」)
- ・ちよつと、こつつさくるもしえ。(ちよつと、こっちへ来なさい。)(中谷 a・「くるもしえ」)
- ・危ねがら次の汽車にすむしえ。(危ないから次の汽車にしなさい。)(松本 a・「蕨とり」)

ほかに、命令表現として、断定非過去形に「ンダ」

〈禁止形〉

禁止形に、断定非過去形に「ナ」が付く形がある。「来る」では、断定非過去形にない 型 k のウ段形「ク」に「ナ」が付く形もある。

- ・くえっばすで突つつくな。(食い箸で突つくな。)(中谷 a・「くえっばす」)
- ・あぶねえがら、あんまるこつつあくな！(危ないから、あまりこっちに来るな！)(中谷

a・「くな」)

- ・さもねえごどで、喧嘩すな。(つまらないこと
で、喧嘩をするな。)(中谷 a・「さもねえごど」)

〈意志形〉

後述の勧誘形・推量形と同形の「断定非過去形+
べ」が使われる。「べ」は「べー」「べえ」「べい」な
どのように長音で発音されることがある。

- ・本読むべい。(本を読もう。)(佐藤・「べえ」)
- ・合わしえるべとさねば合うはずあねんだな
ハソ。(合わせようとしなければ合うはずが
ないんだよな。)(松本 b・「火を見るより明ら
か(承前)」)
- ・姉の着物だから、あげっこすて着せるべえ。
(姉の着物だから、裾上げして着せよう。)
(中谷 a・「あげっこ」)

ただし、意志は、上の形よりも断定非過去形で表
されることが多い。

- ・すぐ走しえで、行って来る。(すぐに走って、
行って来よう。)(中谷 a・「そんま」)

〈勧誘形〉

断定非過去形に「ベス」または「べ」が付く形が
用いられる。「ベス」は勧誘の専用形式である。

- ・まだ学校で会うべす。(また学校で会おう。)
(松本 a・「紫陽花はうなだれていた」)
- ・白菜は平目のさすみだと思ってくべすよ。(白
菜は平目の刺身だと思って食おうよ。)(松本
b・「蕪は蒲鉾」)
- ・観武が原の方さ行くべ、そこでお昼にすベス
ヨ。(観武が原の方に行こう、そこでお昼に
しようよ。)(松本 a・「兵營」)
- ・ためすぬやってみるべ。(試しにやってみよう。)
(中谷 a・「ためす」)
- ・ざっこ捕りするべ。(雑魚捕りをしよう。)(中
谷 a・「ざっこ」)

〈推量形〉

断定非過去形に、「ことだ」が変化した「コッタ」
が付いた形と、「べ」が付いた形がある。推量の「コ
ッタ」は旧南部藩地域(青森県太平洋側と岩手県中
北部)で用いられるが、よく似た用法を持つものが
東北地方に広く分布している。

- ・明日、雨降るごった。(明日、雨が降るだろう。)
(中谷 a・「ごった」)

- ・明日は天気になるごった。(明日は雨になるだ
ろう。)(佐藤・「ゴッタ」)

- ・左を流れる川を見て「この川も盛岡サ行くベ
ナ」と少し安心する。(左を流れる川を見て
「この川も俺と同じように盛岡に行くだろ
うな」と少し安心する。)(松本 a・「蕨とり」)
- ・きつとくるべ。(必ず来るだろう。)(細越・「べ」)
- ・なじよだべ、賛成するべか。(どうだろう、賛
成するだろうか。)(佐藤・「ナジヨダベ」)

「コッタ」「べ」は、過去形にも後接する。

- ・あだまいではんで、風邪ひいだごった。(頭が
痛いから、風邪を引いただろう。)(中谷 a・「は
んて(が)」)
- ・競馬場のほう、ここよりもっと積もったべな。
(競馬場の方は、ここよりもっと雪がつもつ
たろうな。)(松本 a・「大雪」)

〈中止形〉

a類は基幹音便形に、b類は型基幹に、「来る」
は「キ」に、「する」は「ス」に、「テ」を後接する。

- ・ずらめがすて書いてでえ、ほんでくってねえ
手紙だな。(崩して書いていて、訳のわから
ない手紙だな。)(松本 b・「伯父の居候」)
- ・あだるほどる見で、ものしゃべろでや。(周り
をよく見て、物を言えよ。)(中谷 a・「ほどる」)
- ・家さ来てブヅメッテら。(家に来て文句を言っ
ている。)(中谷 b・「ぶづめぐ」)
- ・たがだかなものおがりすて、おもさげながん
すた。(高価なものをお借りして、申し訳あ
りませんでした。)(中谷 a・「たがだかな」)

〈仮定形〉

工段形に「バ」を後接した形がある。「する」の仮
定形は「シェバ」「セバ」「ヘバ」とも、または「ス
レバ」の形になる。

- ・秋陽に焼ければ、ほいどもほれねえ。(真っ黒
に日焼けすると、誰も好きになってくれな
い。)(中谷 a・「あぎび」)
- ・うちの嫁はちゃかっとせば実家に帰りたがる。
(うちの奥さんはちょっと何かあると実家
に帰りたがる。)(佐藤・「ちゃかってば」)
- ・お宮さんでいざらしえば、なぬがおさわり
くるんだじえ。(お宮でいざらをすると、
何かたたりか来るんだぞ。)(中谷 a・「おさ

わり)」

共通語と異なる点は、a 類動詞「書く」の仮定形「カカバ」、b 類動詞「見る」の 型 r の仮定形(ミラバ)「来る」の 型 r の仮定形(クラバ、コラバ)「する」の 型 r の仮定形(スラバ)が使われることである。これらは共通語の「のなら」に相当する用法を持つが、あまり使われない。

- ・もさば、諦めづうごだ。(言ってみれば、諦めということだ。)(中谷 a・「もさば」)
- ・くらば来い。(来るなら来い。)(佐藤・「クラバ」)

「タラ」は、a 類動詞では基幹音便形、b 類動詞では 型基幹、「来る」ではイ段形「キ」、「する」ではイウ段形「ス」に後接する。

- ・おめえはんも、すすおどりさかだたらいがべえ。(あなたも、鹿踊りに加わったらいいだろう。)(中谷 a・「すすおどり」)
- ・何回そつたらわがるう。(何回言ったらわかるか。)(中谷 a・「わがねえ」)(注:そー(言う))
- ・まだやつたら、かつくらしえるがらな。(またやつたら、殴るからな。)(中谷 a・「かつくらしえる」)

〈継起形〉

従属節の事態が起こると主節の事態が起こる、つまり継起的接続を表す専用形式として、「タレバ」タツケ(ヤ)(または縮約形「タケー」)が用いられる。a 類動詞の基幹音便形、b 類動詞の 型基幹、「来る」のイ段形「キ」、「する」のイウ段形「ス」に後接する。

- ・分がりやすく説明すたれば、納得すてけだようだっけ。(分がりやすく説明したら、納得してくれたようだった。)(中谷 a・「すたれば」)
- ・雪解げだど思つたけえ、もは、すがわりの芽っこではったな。(雪が解けたと思つたら、早くも、豆の芽が出てきたな。)(中谷 a・「すがわり」)
- ・おめえも出来たのみだつけや、おらハア、糞まぐれとなつたのヨ。(お前も出来たのを見たら、俺はもう、やけくそになつたのよ。)(松本 a・「コロラドの月」)
- ・暑づどご歩いて来たつけえ、背中サあしえぼでぎだよだ。(暑い中を歩いて来たら、背中

に汗もができたようだ。)(中谷 a・「あしえぼ」)

- ・しばらくぶりで運動すたつけえ、今日はどこかご体痛でえ。(久しぶりに運動したら、今日はあちこち体が痛い。)(中谷 a・「どごかご」)
- 〈否定形〉

a 類動詞は 型ア段に、b 類動詞は 型基幹に、「来る」は「コ」に、「ネア」が付く。「する」は「ス」「サ」に「ネア」が付くが、「サネア」は 型 s 化(サ行五段化)した形である。否定形自体は、形容詞と同じ活用をする。

- ・おらは行がね。(俺はもう行かない。)(菅谷・「は」)
- ・最近はつばる見ねあ。(最近ぜんぜん見ない。)
- ・なすて、こねえの。(どうして、来ないの。)(中谷 a・「なすて」)
- ・とばすのぎばがるやつてるど、長つぎすねよ。(当座しのぎばかりしていると、長続きしないよ。)(中谷 a・「とばすのぎ」)
- ・おら、なつてもさねえよ。(俺は、何もしないよ。)(松本 a・「紙一重」)

〈丁寧形〉

断定形に「アンス」「ヤンス」が付く。a 類動詞と「来る」「する」ではイ段形、b 類動詞では 型基幹に接続する。

- ・うまくいぎあんすた。(うまくなりました。)(中谷 a・「そうすたもんだがら」)
- ・頼まれものとどげにきやんした。(頼まれものを届けに来ました。)(松本 a・「塩引き」)
- ・一周忌のくづよしえすあんす。(一周忌の法事をします。)(中谷 a・「くづよしえ」)
- ・一緒にしやんすよ。(一緒にしますよ。)
- ・電気の笠もあだらすくすやんすたつけヨ。(電気の笠も新しくしなさつたよ。)(松本 b・「火を見るより明らか(承前)」)

断定形に「ス」を後接した形があるが、旧市街地ではあまり使われない。

- ・えぐすか。(行きますか。)(細越・「すか」)

断定形に「ナッス」が付く。

- ・おめはんそつ書くのすか? んだば、おれあこつ書くなつす。(あなたはそちらを書くのですか? それでは、私はこちらを書きますね。)

- ・昨日は雨降ったなっす。(昨日は雨が降りまし
たね。)
- ・お宅のわごさん、立派ぬおなれんすたなっす。
(隣の息子さん、立派におなりになりました
ね。)(中谷 a・「わごさん」)

〈使役形〉

a 類動詞はア段形に「シエル」が付く。その際、「ワ
ラウ(笑う)」「カックラウ(かっ食らう)」などワ行
の a 類動詞はア段形の「ワ」を省略して付く。

- ・わらすさ、餡っこねぶらしえる。(子供に、餡
を舐めさせる。)(中谷 a・「ねぶる」)
- ・いまぬ見でろ、かっくらしえるがら。(今に見
ている、食らわせるから。)(中谷 a・「くらし
える」)
- ・いつまで立だしえる気だ？(いつまで立たせ
る気だ？)(松本 a・「奉安殿」)

b 類動詞はイ段形に「サシエル」、「来る」は「コ」
に「サシエル」が、「する」は「サ」に「シエル」が
付く。

- ・子供だずさ映画ずっぱどミサシエル。(子供た
ちに映画をたくさん見させる。)
- ・こさせる。(来させる。)(細越・「こさせる」)
- ・きんなよふがすさしえだのが？(昨日は夜更
かしをさせたのか？)

「シエル」「サシエル」が付いた使役形は b 類動詞
に準じた活用をする。

〈受身形〉

型ア段形に「レル」が付き、b 類動詞に準じた
活用をする。「レル」が「エル」と発音されることが
ある。

- ・くずすて書がれるづど、俺あ読めねえ。(くず
すて書かれるというと、俺は読めない。)(中
谷 a・「くずす」)
- ・目下にも甘ぐ見られるよ。(目下の人にも甘ぐ
見られるよ。)(中谷 b・「オッコオッコど」)
- ・ポッと来られでも、困るな。(いきなり来られ
ても困るな。)(中谷 b・「ポット」)
- ・車ギタツと止めるづど、後続ぬ追突されるよ。
(車を近づけて止めるというと、後続の車に
追突されるよ。)(中谷 b・「ギタツと」)

〈可能(肯定・否定)形〉

能力可能と状況可能で形式の区別がある。

		能力可能	状況可能
書く	肯定	カケル	カクニイー
	否定	カケネア	カカレネア カカサラネア
見る	肯定	ミレル	ミルニイー
	否定	ミレネア	ミラレネア ミラサラネア

能力可能は、エ段形に「ル」が付く形が用いられ
る。この形は b 類動詞に準じた活用をし、否定形で
はエ段形に「ネア」が付く。

- ・漢字知ってだから、俺あ書げる。(漢字を知っ
ているから、俺は書ける。)
- ・くずすて書がれるづど、俺あ読めねえ。(くず
すて書かれるというと、俺は読めない。)(中
谷 a・「くずす」)
- ・どごどおり、そんな話あ、本気にされるが。
(どこまで本気が分からない、そんな話は、
本気にできるか。)(中谷 a・「どごどおり」)

状況可能肯定形の「ニイー」は、断定非過去形に
接続する。「イー」は形容詞「良い」に由来するが、
この可能形が「ニイグネア」などのように活用する
ことはない。

- ・ここは明るいがら本読むにいー。(ここは明る
いから本を読むことができる。)
- ・この着物はまだ着るにいい / 着るにええ。(佐
藤・「ニエー」)

状況可能否定形は、受身形の否定形、あるいは後
述する自発形の否定形と同形が用いられる。

- ・孫あ、はすかで寝でらながら、遊ばれねえよ。
(孫は、麻疹で寝ているから、遊ぶことはで
きないよ。)(中谷 a・「はすか」)
- ・このお菓子は紋がへえてえるばるでかえっ
ておいそれとかれねえな。(このお菓子は家
紋がはいっているばかりにかえって簡単に
は食えないな。)(松本 a・「南部賞」)
- ・父は歩きながら、「(混んでいて) 渡されなか
ったナ」とつぶやいた。(松本 a・「別れ」)
- ・そんなバフツとすた話であ、来られねえよ。
(そんないいかげんな話では、来られない
よ。)(中谷 b・「バフツと」)

- ・このボールペンあインク出なくて書がさらね。
(このボールペンはインクが出なくて書けない。)
- ・橋あねあがらあつつがらこらさらね。(橋がないからあちから来られない。)

〈自発形〉

この方言には生産的な自発形がある。「カカサル」「ミラサル」「コラサル」「ササル」など、a 類動詞のア段形、b 類動詞・「来る」「する」の型 r のア段形に「サル」が付いた形式が使われる。自発形自体は、a 類動詞と同様の活用型をとる。

- ・おかしくて笑わさつててえへだった。(おかしくて笑えて大変だつた。)(松本 a・「四方拝」)
- ・寝らえねどぎあ、天井板のふすあなひとつつ、ふたつつてかじえでればいづのまが寝らさる。(眠れないときは、天井板の節穴を一つ二つと数えていればいつの間にか眠れる。)(松本 a・「猫イラズ」)
- ・まつすぐ道を進めばこごさこらさる。(まつすぐ道を進めばここに来る。)
- ・あの人あ、いつもあの飲み屋さ、ささつてる。(あの人は、いつもあの飲み屋に、行っている。)(中谷 a・「ささる」)

〈尊敬形〉

「オカケル」「オミレル」など、エ段形に「オ」を上接し、「ル」を付す形が使われる。この形は、「オカキル(お書きになる)」「オミル(お見になる)」など a 類動詞の基幹音便形、b 類動詞の基幹に、「オ」を上接し、「ヤル」を下接した形式の縮約形と思われる。元の形も使われることがある。

- ・おえげえる(お行きになる)(細越・「けえる又げえる」)
- ・おではれんすたがあ。(お出かけになりましたか?)(松本 a・「紀元二千六百年」)(注:ではる(出かける))
- ・おげつてくなんせ。(お買いになってください。)(松本 a・「年越そば」)
- ・お口に合うがどうか、まずおあげつて おみれつてくなんしえ。(お口に合うがどうか、まず召し上がつてごらんになつてください。)(中谷 a・「おあげえ」)

「見る」の尊敬形には、主に尊敬動詞「ゴロズル

(ご覧になる)」が使われる。

「来る」の尊敬形には、尊敬動詞「オデアル(おいでになる)」が使われる。

「する」は、「ナサル」「ミサル」「メサル」など、尊敬動詞の類が使われる。イウ段形「ス」に「ナサル」が付くこともある。

〈継続形〉

継続形は「ている」「ていた」に由来する「テル」「テタ」を用いる。「テル」「テタ」は、a 類動詞では基幹音便形、b 類動詞では型基幹、「来る」ではイ段形「キ」、「する」ではイウ段形「ス」に接続する。

この方言の継続形は、現在時制を表す場合に、ふつうの動詞であれば過去形にあたる「タ」が付いた「テタ」が用いられる点に特徴がある。「テタ」が使われた場合、現在か過去かは文脈によって判断される。「デダ」と発音されるが、最近では「デラ」「テラ」と発音されることも増えてきた。

- ・わらすたつあ、はしえまわつて、あそんでら。
(子供達は、走り回つて、遊んでいる。)(中谷 a・「はしえまわる」)
- ・鉄の扉さおつきな鍵、掛がつてら。(鉄扉に大きな鍵が掛かっている。)(松本 a・「兵営」)
- ・仕事キツカツど決めてぐの見でるど、見でるほうも気持づええなあ。(仕事を手際よく済ませていくのを見ていると、見ているほうも気持ちがいいな。)(中谷 b・「キツカツ」)
- ・ゆんべな寝付ぎ悪くて、明け方までスクモクすてらさ。(昨夜は寝付きが悪くて、明け方まで寝返りをしていたよ。)(中谷 b・「スックモック」)

「テタ」は否定形にも付く。

- ・こごのどごろ、つらあ悪くて行がれねえでら。
(このところ、対面がわるくて行けずにいる。)(中谷 a・「つらあわるう」)
- ・そろで痛でくて、かしえがれねえでら。(腱鞘炎が痛くて、働けずにいる。)(中谷 a・「そろで」)

継続形は、過去を表す場合に「テタッタ」が用いられ、「デダッタ」「デラッタ」「テラッタ」とも発音される。

- ・待つてらつたよ、おへえりおへえり。(待つて

いたよ、お入りお入り。)(松本 b・「暖飯器」)
 ・あの木さ、ひとつきりおっほ来てらったがな
 ぁ。(あの木に、ひとしきりフクロウが来て
 いたがなぁ。)(中谷 a・「ひとつきり」)

〈希望形〉

希望形は、「たい」に由来する「テア」を用いる。
 「テア」は、a 類動詞と「来る」ではイ段形、「する」
 はイウ段形、b 類動詞では 型基幹に接続する。「テ
 ア」自体は形容詞型の活用をする。

- ・缶詰食いてえ。(缶詰を食いたい。)(松本 a・
 「扁桃腺」)
- ・サーカスなんど、そなたに見ってえが。(サー
 カスなど、そなたに見たいか。)(松本 a・「サ
 ーカス」)
- ・おらそれでも勉強すてえ。(俺はそれでも勉強
 したい。)(松本 a・「兄の夜間中学」)

〈のだ形〉

「のだ」に相当する形式として「ンダ」を用いる。
 断定形に接続する。「来る」は、「クンダ」のように
 「ル」が落ちた形に付く場合がある。

- ・そりゃ、いったどきたのつげえって、そうん
だ。(それは、まるきり反対だと、言うのだ。)
 (中谷 a・「いったどきたのつげえ」)(注：そ
 う(言う))
- ・お宮さんでいだずらしえば、なぬがおさわり
くるんだじえ。(お宮でいだずらすれば、何
 かたたりが来るんだぞ。)(中谷 a・「おさわり」)
- ・仕留めだ思った熊あ、ガオラ起き上がってか
 がってきたんだよ。(仕留めだと思った熊が、
 突然起き上がって飛びかかってきたんだよ。)
 (中谷 b・「ガオラ」)
- ・食ってばがるいらずど、腹痛ぐすんだじえ。
 (食ってばがりいるといって、腹を痛くする
 んだぞ。)(中谷 a・「くづおがず」)

否定形に「ンダ」が付いた形が、やや穏やかな禁
 止表現に使われることがある。「そうすべきではな
 い」に近く、音調によって禁止表現になる。

- ・まだ使える物投げで、いだみつたごどすねえ
んだ。(まだ使える物を捨てて、もったいな
 いことをするな。)(中谷 a・「いだみつた」)
- ・待ってるがら、きつとが来るんだよ。(待っ
 てるから、必ず来いよ。)(中谷 a・「きつとが」)

のだ形の丁寧形にあたるものに、断定形に「ノス」
 が付いた形がある。

- ・きのなおどさんきたのす。(昨日、お父さんが
 来たのです。)

断定非過去形に「ンダ」「ノス」が付く場合、文脈
 によって意志表現や命令表現になる。

- ・やる時あくれば、がががどやるのす。(やる
 べき時が来たら、がんがんとやります / やり
 なさい。)(中谷 b・「ガガガガ」)
- ・ほれ、ちゃちゃどくるのす。(ほら、さっさ
 と来なさい。)

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

〈断定非過去形・連体非過去形〉

共通語の形容詞はイ語尾で終わるが、当該方言の
 形容詞は、語尾と前接母音とが融合した形が非過去
 形となる。すなわち、「赤い」は「アケ(ア)」、
 「忙しい」は「イソガス(ー)」、
 「寒い」は「サム(ー)」、
 「おもしろい」は「オモシエ(ー)」となる。この非
 過去形はこのままの形で語幹相当の形式となり、さ
 まざまな語尾が後接する。

断定非過去形と連体非過去形は同形で、以下のよ
 うに用いられる。

- ・威勢はえんども出来は悪う。(威勢は良いが出
 来は悪い。)(中谷 b・「ジャガスカジャガスカ」)
- ・あぐどひびあパックリ割れて痛でえでや。(踵
 のひびが割れて痛いよ。)(中谷 b・「パックリ」)
- ・あがエべべ。(赤い着物、美しい着物、晴着。)
 (細越・「アゲアベベ」)
- ・寒うどご来たがら、手えしゃつけえごど。(寒
 いところを来たから、手が冷たいこと。)(中
 谷 a・「しゃっけえ」)

〈断定過去形・連体過去形〉

形容詞の断定過去形として、語幹(非過去形と同
 形)に動詞型音便基幹「カツ」、さらに「タ」を後接
 した形がある。

- ・釣った魚も、かちんとすみるつくれえ寒がつ
た。(釣った魚も、カチカチに凍るというく
 らい寒かった。)(中谷 a・「すみる」)
- ・怪我つこすて、いだわずがつたよ。(怪我をし
 てかわいそうだったよ。)(中谷 a・「いだわす」)

- ・でほでえ、えがったごど。(とんでもなく良かったこと。)(中谷 a・「でほでえ」)

「タ」の代わりに「ケ」が付く形もあるが、単純な過去形ではない。「ケ」が付くと、話し手の過去の体験や知識を述べる表現になる。動詞の否定形にも、形容詞と同様に「ケ」の付く形がある。

- ・きのなもらった水密んめあがつけ。(昨日もらった桃はうまかった。)
- ・まぐれでもいがつけ。(代用品でもいいよ。)(松本 a・「神庭山」)
- ・おやづあこねあがつけ。(親父は来なかったよ。)
- ・はきとすねがつけ。(はっきりしなかった。)(中谷 b・「ズラクラズラクラ」)

〈推量形〉

動詞と同様に「コッタ」と「ベ」が用いられる。

「コッタ」は断定非過去形に後接するが、過去形には付かない。

- ・暑づう夏だがら、今年あよながええごった。(暑い夏だから、今年は作柄がいいだろう。)(中谷 a・「よなが」)
- ・けえづでも塗れば、なんぼかええごった。(こいつでも塗ればいくら良いだろう。)(松本 a・「燕のとぶ頃」)
- ・さっばる元気で無え、あとなんぼももたねえごったあ。(少しも元気ではない、あといくらも保たないだろう。)(松本 a・「紫陽花はうなだれていた」)

「ベ」は、断定非過去形、語幹 + 動詞型尾略形「カ」、または、語幹 + 動詞型音便形「カン」に付く。「ベ」は丁寧形や過去形にも付く。

- ・いついつ、めぬぎたでなくても、いがべでや。(いちいち、目くじらを立てなくても、良いだろうよ。)(中谷 a・「めぬぎたでる」)
- ・買う金なんか、どこ探したってながんすべ。(ないでしょう。)(松本 a・「酷暑」)
- ・であどごさねがったべ?(台所になかったらう?)

〈中止形〉

語幹(非過去形と同形)に「クテ」を後接した形になる。

- ・腹痛えくて、ここまですまった。(腹が痛くてしゃがんでしまった。)(中谷 a・「ここまる」)

〈仮定形〉

語幹(非過去形と同形)に「バ」を後接した形がある。

- ・エバエ。(良ければ良い。)(佐藤「エバエ」)
- ・ねあば買ってこ。(無ければ買ってこい。)

稀に、動詞型ア段形「カラ」に「バ」が付く形がある。

- ・ほんでもいがらば、来て稼げ。(それでも良ければ、来て働け。)(中谷 a・「ほんでも」)

ほかに、動詞型音便基幹「カツ」に「タラ(バ)」を後接した形がある。

- ・雪道滑って、おつかねえがたら、俺サたもづいであるっていいよ。(雪道が滑って、恐かったら、俺につかまって歩いていいよ。)(中谷 a・「たもづぐ」)

〈否定形〉

語幹(非過去形と同形)に「ク」をつけ「ネア」を後接した形になる。

- ・お前えはんなんか、おつかなぐねえよ。(お前さんなど、恐くないよ。)(中谷 a・「ごろづぐ」)
- ・おべだふりもよぐねえ、すらねふるはもつとよぐねえ。(知っているふりもよくない、知らないふりももつとよくない。)(中谷 a・「すらねふる」)

〈なる形〉

語幹(非過去形と同形)に「ク」をつけて「ナル」を後接した形になる。

- ・あがエくなる。(赤くなる。)(細越・「あがエ」)
- ・もうは、こええくなつた。(もう、疲れた。)(中谷 a・「こええ」)
- ・猫あ、矩健でまるけくなつたら。(猫は、矩健で丸くなっている。)(中谷 a・「まるけ」)

〈継続形〉

語幹(非過去形と同形)に「ク」、さらに「テル」「テタ」がついて継続を表す。「テタ」の実際の発音は「テラ」「デラ」「デダ」などになる。形容詞と同じ活用をする動詞否定形にも用いられる。

- ・まみすくてらすか。(お達者でいましたか。)(佐藤・「マミスケテラスカ」)(注:まみす(元気だ))
- ・畑乾いだな。雨はつばるふらねんでらがらな。(畑が乾いたな。雨がつぱり降らないでい

るからな。)

〈丁寧形〉

当該方言の非過去形は語尾と前接母音とが融合した形になるが、丁寧形ではそれらが融合する前の形に「ゴザンス」「ガンス」が付く。「ゴザンス」「ガンス」は動詞の否定形にも付く。

- ・おでえもつなんぼあげればよござんすう。(お金はいくらあげればようございますか。)(中谷 a・「おでえもつ」)
- ・なもなも、そんたなごあなござんすう。(何にも、そんなことはないのございます。)(中谷 a・「なも」)
- ・よがんすでながんススカア。(良いのではないですか?)(松本 b・「蕪は蒲鉾」)
- ・なじょどもかじょども言えながんす。(どうともこうとも言えませんが。)(佐藤・「ナジヨドモカジヨドモ」)

断定非過去形に「ナ(ッ)ス」が付き、丁寧表現として用いられる。

- ・なんたら、あづうなっすう。(なんとまあ、暑いですね。)(中谷 a・「あづう」)
- ・さみなっす。(寒いですね。)(細越・「なす又なっす」)

〈のだ形〉

連体形に「ンダ」を後接した形になる。

- ・あんまる側さ寄らねばええんだ。(あまり側に寄らなければよいのだ。)(松本 a・「紫陽花はうなだれていた」)
- ・(この鼠は)余程おっきんだな。(よほど大きいのだな。)(松本 a・「猫イラズ」)

のだ形の丁寧表現に、「ノス」が付いた形がある。

- ・カズ子いま、忙しのス。(カズ子は今、忙しいのです。)(松本 a・「カズ子」)

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形・連体非過去形〉

形容名詞述語、名詞述語とも断定非過去形は形容名詞・名詞に「ダ」が付く形になる。

- ・じゃこれアきれいだ。(やあこれは美しい。)(細越・「じゃ」)
- ・クウダ。(苦だ、心配だ。)(菅谷・「クウス」)
- ・あの人あ、あぐど見えねえつくれえ、早く走

しえる人だ。(あの方は、踵が見えないというくらいに、早く走れる人だ。)(中谷 a・「あぐど」)

連体非過去形では「ナ」が付く形が用いられる。名詞では、述語としての連体形は用いられない。

・きれなはごこ持てこ。(綺麗な箱を持ってこい。)

〈断定過去形・連体過去形〉

形容名詞述語の断定過去形・連体過去形は、「ダッタ」「デアッタ」の形をとる。

・雪が降ったから昨日の夜はすんつかだつた / すんつかであった。(静かだった。)

名詞述語の断定過去形・連体過去形も、「ダッタ」または「デアッタ」の形をとる。

- ・しょうぶつくだ! 思った通りだつたじゃ。(勝負がついた! 思った通りだつたぞ。)(中谷 a・「しょうぶつくだ」)
- ・あいてっこほしがっていたところであった。(相手を探していたところだった。)(佐藤・「エアデッコ」)

〈推量形〉

動詞・形容詞と同様に「コッタ」「ベ」が用いられ、断定形に後接する。形容詞と同様、「コッタ」は過去形には付かないが、「ベ」は過去形にも付く。

- ・あたりげえすだから、こんだあちよつとてえへんだごつた。(中風の再発だから、こんどはちよつと大変だろう。)(中谷 a・「あたりげえす」)
- ・ゆやアやすみだごつた。(風呂屋は休みだろう。)(細越・「ごつた」)
- ・なんたら、あぐどする童すたづだべ。(なんとまあ、悪いことばかりする子供たちだろう。)(中谷 a・「あぐどする」)
- ・なぬすたたて、あんまるげえだべじゃ。(何をしたとしても、あまりにひどいだろうよ。)(中谷 a・「なぬすたたて」)
- ・なんと、ぬぐう男だべ。(なんと、憎い男だろう。)(中谷 a・「ぬぐう」)

〈中止形〉

「デ」を後接した形になる。

- ・ゆんべなの大雪で、家から出るのぬズボズボど雪こいできあんすた。(昨夜の大雪で、家から出るのにズボズボと雪をかき分けて来

ました。)(中谷 b・「ズボズボ」)

〈仮定形〉

「ダバ」「デアレバ」「ダツタラ(バ)」が後接した形になる。

- ・やぐどんこだばえんども、ほんこだば、おらあかだらね。(仮勝負ならいいけれども、本気なら、私は加わらない。)(中谷 a・「やぐどんこ」)
- ・それだば、おらえぬもある。(それなら、我が家にもある。)(中谷 a・「おらえ」)
- ・はだすだば、水でさっと洗えば何ともねえがらな。(裸足なら、水でサッと洗えば何ともないからな。)(松本 a・「農業実習」)
- ・子供であれば、百円だ。(子供なら、(料金は)百円だ。)
- ・雨だったら/雨だったらば、なじよすべ?(雨だったら、どうしよう?)

〈否定形〉

「デネア」を後接した形になる。

- ・やっけえばかりが豆腐であねえ、かでえ豆腐だってあるんだじえ。(柔らかいばかりが豆腐ではない、かたい豆腐もあるんだぞ。)(中谷 a・「やっけえ」)

〈なる形〉

「又(または二)ナル」を後接した形になる。

- ・おどげえほんこになる。(戯談がほんとうになる。)(細越・「おどげ」)
- ・おすれっこつけてきれいなって来たどお。(白粉をつけて綺麗になって来たぞ。)(中谷 a・「おすれっこ」)
- ・砂糖しけて、こごりになつたら。(砂糖が湿気って、塊になっている。)(中谷 a・「こごり」)
- ・お宅のおごれんさん、きれいにおなれんすたなつす。(お宅のお嬢さん、きれいにおなりになりましたね。)(中谷 a・「おごれんさん」)

〈丁寧形〉

丁寧な表現として、中止形に「ゴザンス」「ガンス」が付いた形が使われる。

- ・形ばかりのおうずりでござんすう。(形ばかりのお返しでございます。)(中谷 a・「おうずり」)
- ・おもでさおぎゃくさんでがんすよ。(外にお客さんですよ。)(松本 b・「六さん」)

・ええおすめりでがんすな。(良い雨ですね。)

(松本 b・「柵屋根」)

断定形に「ナ」+「(ッ)ス」が付き、丁寧表現になる。

・いいお天気だなつす。(いいお天気ですね。)(中谷 a・「なつす」)

〈のだ形〉

「ナ」に「ンダ」を後接した形になる。丁寧形は「ナ」に「ノス」が付いた形になる。

- ・俺だづあ、お互いきょうでまわりなんだよ。(俺たちは、お互い親戚なのだよ。)(中谷 a・「きょうでまわり」)
- ・俺だづあきょーでまーりなのす。(俺たちは親戚なのです。)

用例出典

細越：細越孝一(1963)『盛岡ことば(盛岡市立城南小学校開校七十周年記念)』盛岡市

佐藤：佐藤好文編著(1981)『盛岡のことば』盛岡市

菅谷：菅谷保之(1998)『もりおか弁入門』私家版

中谷 a：中谷眞也(2010)『盛岡ことば辞典』私家版

中谷 b：中谷眞也(2010)『盛岡オノマトペ辞典』私家版

松本 a：松本源蔵(2001)『わたしの盛岡』私家版

松本 b：松本源蔵(2004)『続・わたしの盛岡』私家版

参考文献

小松代融一(1976)『岩手方言の音韻と語法』私家版

佐藤好文編著(1981)『盛岡のことば』盛岡市

菅谷保之(1998)『もりおか弁入門』私家版

中谷眞也(2010)『盛岡ことば辞典』私家版

中谷眞也(2010)『盛岡オノマトペ辞典』私家版

細越孝一(1963)『盛岡ことば(盛岡市立城南小学校開校七十周年記念)』盛岡市

本堂 寛(1982)『岩手県の方言』講座方言学 4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会

松本源蔵(2001)『わたしの盛岡』私家版

松本源蔵(2004)『続・わたしの盛岡』私家版

(竹田晃子)